**淡路島北部　弥生後期の山間地集落遺跡群群の中心集落「淡路市　舟木遺跡」**

**近くの五斗長垣内遺跡を上回る新たな「弥生の鉄器拠点とみられる国内最大級の鍛治工房跡」が出土**

**2017. 1. 26.　神戸新聞他の朝刊より**

# 淡路 弥生期の鉄器拠点

淡路市舟木にある弥生時代の山間地集落遺跡「舟木遺跡」の発掘調査で、新たに鉄器生産工房跡と、手工業品を生産した可能性のある工房跡、鉄器計57点などが見つかった。兵庫県と同市の両教育委員会が25日発表した。過去に同市で見つかった近畿最大の鉄器生産遺跡「五斗長垣内遺跡」（同市黒谷）を上回る規模と推定され、専門家は「弥生時代、淡路島が鉄器の製作や保有の地として有力視されていたことを裏付ける発見だ」と指摘する。（29面に関連記事）

## 舟木遺跡

同時に出土した土器の年代から、工房があったのは2世紀後半とみられる。見つかったのは4棟の大型の竪穴建物跡。うち3棟は敷地が円形で直径が10㍍を超える大型で、うち1棟から4基の炉の跡が確認された。柱が外側に寄り中央部が広いことから、作業をする空間だったと想定される。また4棟全てから鉄器製作に使ったとみられる石器を多数発見。鉄滓は計57点あり、鍛冶関連鉄器など小型工具が出土した。

針状鉄器は小さいものでは長さ4㌢、幅1㌢で、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「小型工具を使って何らかの手工業品を生産する大規模な工房群が存在した可能性がある」と指摘する。

2009年に工房12棟と鉄器127点が見つかった五斗長垣内遺跡では、鉄鏃（矢尻）などの武器類が多く出土した一方、舟木では明確に武器と認められるものはなかった。二つの集落はわずか約6㌔の距離でほぼ同時期に存在していたが、生産物に違いがあることが判明。五斗長垣内が衰退した後も舟木で鉄生産が続けられていることも分かった。（切貫滋巳）

舟木遺跡　弥生時代後期～末期（1世紀～3世紀初頭）に存在したとみられ、1966年に発見された。面積は推定約40万㎡。91年の調査で見つかった出土物が、古代の中国で製作された青銅製の中国鏡の破片であることが明らかになっていた。

舟木遺跡で見つかった小型鉄器

## 工房跡発見、近畿最大か

### 「五斗長垣内」近く　小型工具も出土

炉の跡が確認された工房の遺構。土が赤っぽく焼けている＝淡路市舟木（撮影・内田世紀）

# 鉄器の交易なりわいか

## 淡路に近畿最大の工房跡

近畿で最大規模とみられる鉄器生産跡が見つかった舟木遺跡周辺。現場は木々に囲まれている＝淡路市舟木（撮影・内田世紀）

### 「海の民」との関係も推認

### 邪馬台国前の社会、解明期待

「松帆銅鐸」（南あわじ市）や「五斗長垣内遺跡」（淡路市）など、弥生時代における重大な発見が相次ぐ淡路島。近畿最大規模の鉄器生産遺跡と推定される「舟木遺跡」（同）の調査が進めば、古代史でも謎が多い邪馬台国成立前の日本社会の状況や、島の果たした役割の解明につながると期待されている。（1面参照）

舟木遺跡があるのは島西側の海岸から約2㌔離れた標高約150㍍の丘陵地。広さは南北約800㍍、東西約500㍍。専門家は「島でありながら海から隔絶された内陸に位置する特異な立地」と指摘する。弥生時代後期は、西日本全域で戦乱が起きていたとみられ、各地に山間地集落が急増。島北部にも約200カ所の集落ができ、広大な面積の同遺跡は中心的存在とみられていた。

同遺跡では、周辺で稲作をした形跡がないが、今回鉄器や手工業品の生産工房跡が見つかったことから、淡路島の鉄の交易をなりわいとしていた可能性がある」とみる。

また、出土した土器などから、奈良県立橿原考古学研究所の森岡秀人・共同研究員（考古学）は「丘陵の頂上部に、政治的な施設や祭祀に関係する施設など重要な遺構が発見される可能性が高い」と期待を寄せる。

昨年、「日本遺産」に認定されたストーリーで焦点が当たった「海の民」の関与も推測される。当時の鉄の幸次長は「鉄器や手工業品の交易をなりわいとしていた可能性があるにくい地域だ。伊藤次長は「素材を運ぶにしても、製法の情報を得るにしても、船を造って操り、各地にネットワークがある人たちが欠かせない」と指摘。今回出土した製塩土器なども海に関係する集団の存在を示唆しているとする。

多数出土した小型鉄器

淡路市教委は2月5日午後1時半から、同市小倉の北淡震災記念公園で調査成果報告会を開く。（切貫滋巳）